良く發育した株に出會い，莖，葉の腺毛がコジキイチゴに比し短かい性質を確めた。しかし多期であつたので花果は見得なかつた。更に6月千葉縣清澄山にてこの型のものが處々の疎開せる谷沿い等に結實せるを見出し，東京大學千葉演習林所藏の腊葉を檢したる所，コジキイチゴ或はヒメバライチゴと誤認された有花の腊葉が出て來た。尙意外にも眞のコジキイチゴは一枚もなく，筆者も清澄ではその自生に接しない。しかしコジキイチゴは南伊豆から常陸の御前山に分布が及んでいるから，房總にも產する事と思う。さて以上の標本を精査した結果，これはリュウキュウヤブイチゴである事が判明した。

此所で注意すべきは 1930 年紀伊產品によりキシュウイチゴ，次いで 1934 年伊勢產品によりイセイチゴがそれぞれ小泉・本田兩先生によつて記載された事である。兩先生ともリュウキュウヤブイチゴとは格別比較をされていないが，この三者は同一種と考える。葉裏の有毛狀態，老枝に腺毛の有無等は變化の多い性質であり，又果實については清澄山にも丸いものと長めのものがあるが，これも中間型で連絡される。唯南方產のものは花・實・葉すべて稍々大型にして特に琉球產のものは枝の先に數個の花が集つて円錐花序をなす傾向があるに對し，北方產は 1～3 個の花が枝先に着くのみである。しかしこれは南方產が發育良好なる爲と考えられ，中間的のものもある。本種はコジキイチゴに近緣であるが，花が大形にして腊葉で徑 4cm に達するものあり，從つて花瓣の長さもコジキイチゴが 1cm位なるに對し 2cmに近く，幅も廣く廣倒卵形を呈し，コジキイチゴの長楕円形～篦形なるとは容易に區別が出來る。又果實がコジキイチゴより丸味を持つている。更に無花果の時も腺毛の長短により識別出來る判然たる種類である。

尙國立科學博物館の腊葉を見るに，牧野，根本兩氏共編の東京帝室博物館天產課日本植物乾腊標本目錄中　オオバライチゴの項に紀伊三浦產とあるはリュウキュウヤブイチゴであり，キシュウイチゴの type locality も紀伊三浦である。終りに腊葉の研究を許された同館並に東大理學部植物學教室に深く謝意を表する。

Rubus okinawensis Koidz., Consp. Rosac. Jap. 140 (1913); Masamune, Fl. and Geobot. Stud. Yakusima 231 (1934). *Rubus kinokuniensis* Koidz., Fl. Symb. Or.-As. 67 (1930), et in Acta Phytotax. Geobot, **3**: 176 (1934). *Rubus isensis* Honda in Bot. Mag. Tokyo **48**: 406 (1934). Distr.: Honshū (Prov. Awa, Izu, Ise and Kii) Kyūshū (Prov. Chikuzen, Hizen, Hyuga, Satsuma and Ohsumi) and Lyukyu. This species is closely related to *Rubus asper* Wallich. However, its glandular hairs are shorter (about 1 mm long) and its petals are larger (about 2 cm long, 1.5 cm wide).

お知らせ。山形大學農學部應用植物學研究室では**地衣學雜報**と題するパンフレットを發行した。編輯は同研究室の佐藤正己博士で，地衣學界のニュースや文獻抄錄など，地衣類に關する記事だけを揭載してある。A5判4頁，發行は不定期で本年5月に第1號が，7月に第2號が出版された。入手希望の向は1部に付き6圓切手6枚を封入し山形縣鶴岡市，山形大學農學部佐藤正己氏宛申込めば，殘部のある限りお送りする由。